

施設高齢者の園芸活動を支援した職員の意識・行動変化

増谷順子¹・太田喜久子²

¹ 首都大学東京健康福祉学部

² 慶應義塾大学看護医療学部

e-mail : masuya@tmu.ac.jp

Changes in the Awareness and Behaviors of Staff Members who have Provided Assistance in Horticultural Activities of Elderly Residents of a Facility

Junko MASUYA¹ and Kikuko OTA²

¹ Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

² Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University

Summary

This study aimed to clarify the changes in the awareness and behaviors of staff members who provided assistance in horticultural activities of elderly residents of a facility. After six weeks of a horticultural activity interventions provided to nine elderly residents of an intensive-care elderly people's home, a questionnaire survey was conducted with sixteen staff members on horticultural activity methods, changes in participants observed by staff members, changes in the staff members' interaction with participants, and reactions of participants. Although the survey conducted prior to the intervention showed that the majority of staff members had little experience or interest in horticultural activity, many responded after the intervention by saying that the activity period "would be better if it [were] longer," seeking for the continuation of the activity. Many responded "yes" to the question of whether there were any changes in the participants or in how they interacted with the participants. Due to the horticultural activity intervention, the staff members witnessed that the participants enjoy horticultural activities even outside their activity time and look forward to activity days, which led them to believe that the quality of participants' lives improved. This produced an interactive effect that resulted in the joy of the staff members and their interest and eagerness toward horticultural activities. On the other hand, some staff members replied that "they didn't know" about the changes in participants and that there was "no change" in how they interacted with the participants. This was influenced by the presence or absence of interest in gardening activities, years of experience in dementia care, and the level of participation in gardening activities. To increase the effectiveness and extent of horticultural activities program in dementia care settings, it is important for the authors to interact in a manner that alters the staff members' awareness and thereby behavior. This will enable staff members and participants to experience horticultural activities together, and staff members themselves would become interested in horticultural activities and thereby would identify a corresponding change in participants. Furthermore, programs that correspond to the participants' psychological state, needs of the facility, and conditions of the personal and physical environment will need to be devised.

Keywords : changes in staff, elderly, horticultural activities, questionnaire survey

職員の变化, 高齢者, 園芸活動, アンケート調査

緒 言

平成 26 年度高齢社会白書によると, わが国の 65 歳以上の高齢者は 3,190 万人であり, 総人口に占める割合(高齢化率)は 25.1%である(内閣府, 2015)。また, 厚生労働省は(2015), 2012 年時点で全国の認知症有病率を 15%と推計し, 認知症高齢者数を推計約

462 万人とし, 軽度認知障害(MCI: Mild Cognitive Impairment)の高齢者も推計約 400 万人と報告している。認知症への薬物療法は, ある程度の進行抑制が可能となってきたが, 根治的な治療はなく(長田, 2007), 加齢に伴う変化を背景として副作用が起りやすいといわれている(石井・秋下, 2013)。これらの限界に対して認知症高齢者のウェル・ビーイング(well-being)すなわち, 心身が安定していて自発的に思いや意志を表出できる状態をもたらすためには非

2015 年 4 月 30 日受付. 2015 年 7 月 21 日受理.

本研究は平成 26 年度科学研究費(研究活動スタート支援)補助金交付金(課題番号 25893197)を受けて実施した研究の一部である.

人植関係学誌. 15(1):19-24, 2015. 論文(事例研究).

薬物療法との併用が重要になってくる（角田，1996）。

本研究が注目している園芸活動の多くの研究では、高齢者や認知症高齢者の心理・社会面（熊谷ら，2001），身体・行動面（斉藤ら，2007），認知面（寺岡・原田，2003），生理面（豊田ら，2009）への効果が検証されてきている。しかしながら、高齢者を参加者とした園芸活動の介入に協力した職員の意識・行動変化に着目した研究は見当たらない。

そこで本研究では、特別養護老人ホームに入所中の高齢者を参加者とした園芸活動の介入に協力した職員に焦点を当て、園芸活動による施設高齢者の変化から引き出された職員の意識・行動変化を明らかにすることとした。

材料および方法

1. 調査対象

調査対象は特別養護老人ホーム1施設の1フロアに勤務している看護・介護職員（以下職員）16名である。調査対象の条件は、1) 週1回、6週間の園芸活動プログラムに参加した高齢者9名（以下参加者）の日常生活ケアに携わり、参加者の状態を把握している職員、2) 園芸活動プログラムの介入に協力した職員、であった。参加者の属性は、医師により認知症と診断されていない65歳以上の高齢者で、女性7名、男性2名であった。平均年齢は89 ± 7.1歳、MMSEの平均得点は23.1 ± 5.5点であった。現病歴は4名が脳梗塞後、2名が大腿骨頸部骨折後、1名が糖尿病で車椅子を使用していた。1名がパーキンソン病、1名が変形性膝

関節症で独歩可能であった。9名全員が週1回の音楽活動に参加していた。

2. 園芸活動プログラムの方法

筆者がこれまでに開発した四つのカテゴリー、10の構成要素で構成される園芸活動プログラム（増谷・太田）の構造を第1表に示した。園芸活動プログラムは、パーソン・センタード・ケアの理論に基づいた10の構成要素からなる支援を包含する。

活動体制は、著者らと職員が参加者を1グループ3名に編成し3グループに分けた。1グループに対して園芸活動実施者（著者）1名、職員2名、協力者（認知症看護の経験がある看護師で、園芸に興味がある者）2名の計5名が対応した。1セッションは、週1回、屋内で30～40分程度であり、6週間、計6セッションを実施した。筆者は、園芸活動プログラム介入前に職員にプログラム内容や介入方法を説明し介入方法の統一を図った。活動方法は参加者の活動想起、楽しみの持続をねらい、6週間で収穫まで可能なスケジュールとし、参加者1人につき1鉢を継続して育てた。毎回のセッションでは前回までに育てた植物の世話による「記憶を呼び戻す作業」と新たな植物の植えつけによって楽しみや感覚刺激をねらいとした「新たな作業」を組み合わせた。植物は参加者が生活しているフロア内の共有スペースや居室に置いた。植物はベビーリーフ、カイワレダイコン、シクラメン、多肉植物を題材とした。職員はセッション中、参加者の側で言動を観察したり活動補助を行った。

3. 調査方法

6週間の園芸活動プログラム終了後に、園芸活動プ

Table 1. The structure and the content of the horticultural activities program.
第1表. 園芸活動プログラムの構造と内容.

プログラムの構造	ねらい	具体的方法（内容）
1. 精神的側面	1) 植物の五感刺激による豊かな感情表出への支援 2) 植物の今後の生長に対する期待感の表出への支援 3) 植物の生長変化に対する思いの表出への支援 4) 植物への愛着の表出への支援 5) 植物の日常での世話による楽しみの表出への支援	A 植物の世話を通して視覚（花の色）、嗅覚（花の香り）、触覚（土の触り心地）の刺激。収穫物の調理・試食による味覚（野菜の味）の刺激 B セッションや日常での植物の継続的世話と觀賞、今後の植物の生育に関する情報提供 C1 セッションや日常での植物の継続的世話と生長変化の稱賛 C2 セッションや日常での植物の觀賞と収穫物の試食の場の設定 D 1人1鉢の種まきや植えつけ、セッションや日常での継続的世話 E1 今後の作業スケジュールに関する情報提供 E2 「記憶を呼び戻す作業」と「新たな作業」の組み合わせ E3 定期的（週1回）活動と日常での継続的世話
2. 身体・行動的側面	6) 継続的な世話による選択、判断、作業の自発性への支援 7) グループ活動による行動症状軽減への支援	F 材料の選択肢提示 G 道具の準備・選択・使用方法の説明 H1 作業方法の視覚的情報の活用 H2 作業方法の順序立てた簡潔な説明 H3 作業方法のモデル提示 I1 出来るだけ自分で作業するように見守りと稱賛 I2 自分のペースで作業できるように安心できる雰囲気作り J1 セッション開始時の活動説明と挨拶 J2 植物を媒体とした会話の仲介と話題作り
3. 社会的側面	8) グループ活動による他者との交流への支援 9) グループ活動による他者に対する思いやりの表出への支援	K 作業方法の視覚的情報の活用とモデル提示 L1 セッション開始時の自己紹介と会話の仲介 L2 他の参加者との植物の觀賞と収穫物の試食の場の設定 M1 経験者と未経験者を含んだグループ構成 M2 道具や材料の共有に対する声かけ
4. 認知的側面	10) 季節に合った植物の世話による見当識向上への支援	N 固定のグループ構成による定期的（週1回）活動、セッション開始時の自己紹介 O 毎回、同じ場所での活動（活動場所と栽培場所は同じにする） P1 セッションや日常での継続的世話と觀賞 P2 セッション中に撮影した写真の活用 Q1 植物名、日付、自分の名前をネームプレートへの記載 Q2 各自にカレンダー配布、活動日にシール貼付 R1 季節に合った植物の使用と季節に関する話題提供 R2 屋外での活動や継続的世話、天気・季節に関する話題提供

プログラムに協力した職員16名に対して、園芸活動実施に関するアンケート票の記入を依頼した。依頼方法は、施設管理者をとおして、職員に無記名のアンケート調査用紙を配布し、記入後の用紙は専用の封筒に入れてもらい、用紙配布後14日目に著者増谷宛に郵送で返信してもらった。調査期間は2014年7～9月。

4. 調査内容

職員には、基本属性（性別、年代、職種、認知症ケア経験年数、園芸経験の有無、園芸活動の興味の有無、園芸活動プログラムへの参加回数）、園芸活動の期間、時間、内容の評価についての質問項目と、職員からみた参加者の変化、職員の参加者への関わり方の変化と参加者の反応、職員の感想・活動への要望についての自由記載欄を設けた。

5. データの比較・検討

職員の基本属性、園芸活動の期間、時間、内容の評価は単純集計を行った。職員からみた参加者の変化、職員の参加者への関わり方の変化と参加者の反応、職員の感想・活動への要望の自由記述は質的分析を行った。質的分析は複数の研究者間で行い、結果の信頼性を確保した。

6. 倫理的配慮

施設管理者、職員には研究趣旨と方法について説明し承諾を得た。具体的内容は、研究趣旨、参加の自由、匿名性の保持、データの秘密厳守等について口頭と書面にて伝え同意を得た。本研究は首都大学東京研究安全倫理委員会の承認を受けて実施した。

結 果

1. 職員の基本属性

職員の基本属性を第2表に示した。職員は女性8名、男性8名で全員から回答を得た。職種の内訳は介護職15名(94%)、看護職1名(6%)であった。年齢の構成は20歳代が最も多く7名(44.0%)、次いで40歳代5名(31%)で、認知症ケア経験年数は5年未満12名(76%)、5年以上4名(24%)と、年齢が若く経験が浅い職員が多かった。園芸活動の経験の有無は「あり」が5名(31.3%)、「なし」が11名(68.7%)、園芸活動の興味の有無は「あり」が9名(56.3%)、「なし」が7名(43.7%)であった。園芸活動の参加回数で最も多かったのは5回以上10回未満が5名(31.3%)、次いで3回以下が4名(25.0%)、15回以上は2名(12.5%)であった。

2. 職員からのアンケート調査の結果

職員からのアンケート調査の結果を第3表に示した。

1) 園芸活動の方法 (Q1～Q3)

期間は7人(43.7%)が「ちょうど良い」、8人(50.0%)が「もっと長い方が良い」と回答した。時間は14人

(87.4%)が「ちょうど良い」と回答した。内容は12人(75%)が「ちょうど良い」、3人が「普通」(18.7%)と回答し、「ちょうど良い」と回答した者には、「最終回に、育てた野菜を食べられたのが良かった」等のコメントがあった。

Table 2. General characteristics of staff who participated in horticultural activities program.

第2表. 園芸活動に参加した職員の基本属性.

		(人)	(%)
性別	女性	8	50.0
	男性	8	50.0
年齢	20歳代	7	44.0
	30歳代	3	19.0
	40歳代	5	31.0
	50歳代	1	6.0
職種	介護職	15	94.0
	看護職	1	6.0
認知症ケア経験年数	3年未満	6	38.0
	3年以上5年未満	6	38.0
	5年以上10年未満	2	12.0
	10年以上15年未満	1	6.0
	15年以上	1	6.0
園芸活動の経験の有無	あり	5	31.3
	なし	11	68.7
園芸活動の興味の有無	あり	9	56.3
	なし	7	43.7
園芸活動プログラムへの参加回数	3回以下	4	25.0
	3回以上5回未満	2	12.5
	5回以上10回未満	5	31.3
	10回以上15回未満	3	18.7
	15回以上	2	12.5

Table 3. Contents of the questionnaire and answering from staff.

第3表. アンケートの内容と職員からの回答.

調査項目	回答数 (人)	(%)
Q1. 園芸活動の期間 (6週間) はどうでしたか?		
ちょうど良い	7	43.7
もっと長いほうが良い	8	50.0
もっと短いほうが良い	0	0.0
わからない	1	6.3
その他	0	0.0
Q2. 園芸活動の時間 (30分程度) はどうでしたか?		
ちょうど良い	14	87.4
もっと長いほうが良い	1	6.3
もっと短いほうが良い	0	0.0
わからない	1	6.3
その他	0	0.0
Q3. 園芸活動の内容はどうでしたか?		
内容はちょうど良かった	14	87.4
内容は普通だった	1	6.3
内容は悪かった	0	0.0
わからない	1	6.3
Q4. 園芸活動によって参加者に変化はありましたか?		
あり	12	75.0
なし	0	0.0
わからない	4	25.0
Q5. 園芸活動によって参加者にどんな変化がみられましたか? (複数回答)		
1日に1回は自分の花を見に行ったり水やりをするなど意欲的になった	5	
精神面		
笑顔が増えた	3	
「花映えているかな」「水をあげないと」等、植物への愛着が芽生えた	2	
身体・行動面		
積極的に水やりをし、離床時間が増えた	4	
行動範囲が広がった	2	
社会面		
植物の生長や世話の話題で、職員や他の利用者との会話が增进了	7	
水やりが日課になり、役割ができた	4	
園芸の日は洋服をおしゃれなものに着替えていた	1	
認知面		
活動が習慣化し、曜日を気にするようになった	3	

Q6. 園芸活動を開始してから、参加者への関わり方は変化しましたか？			
あり	12	75.0	
なし	4	25.0	
Q7. 参加者への関わり方で変化した内容はどのようなことですか？（複数回答）			
1.水やりに誘ったり、植物の話題を持ちかけるようにした	12		
2.植物の話をするため、入室回数が増えた	1		
3.家族が面会に来た際には園芸の話題を提供した	1		
4.園芸以外の活動にも参加できると思い、参加を提案した	1		
Q7-1に対する参加者の反応（複数回答）			
・自発的な会話が増えた	7		
・居室から共有スペースまで植物を見に行くようになり行動範囲が広がった	4		
・植物の様子を心配する様子がみられた	4		
・自分から水やりするようになり積極性が増した	3		
・職員と参加者の距離が縮まり、職員に他の用事も頼むようになった	3		
・植物の生長を見ると笑顔が増えた	2		
・一緒に水やりをしている時に、職員に対して「忙しいのありがとう」と感謝の気持ちを出すようになった	1		
・自分の責任（植物を枯らしてはいけない）といった意識につながっていた	1		
Q7-2に対する参加者の反応			
・植物についての共通の話題で会話が増えた	1		
Q7-3に対する参加者の反応			
・家族に自ら園芸の話をしており、会話が増えた	1		
Q7-4に対する参加者の反応			
・職員の提案に賛同し、他の活動にも参加するようになった	1		
Q8. 園芸活動に対する感想や要望をご自由にお書きください。			
感想	・週1回の活動を楽しみにしたり、心待ちにしている様子がみられてよかった	11	
	・生活に新たな刺激が加わり張りが出て、生活の質が向上したと思う	5	
	・活動を楽しみにされている様子を見て、こちらも嬉しい気持ちになった	2	
	・活動にやりがいを感じている様子がみられてよかった	1	
	・真剣な表情で水やりする姿は素敵だと思った	1	
	・期間がもっと長ければ、扱える題材も増えたと思う	2	
	・収穫した野菜はサラダにするなど、もうひと工夫すると楽しめると思う	1	
	・自分でもユニット内で植物を育てて、利用者に楽しんでもらいたいと思った	1	
	要望・課題		
	・園芸活動の方法やテキストのようなものがあれば参考にした	1	
・園芸活動中に職員がずっと付き添うことや見に行くことができない現状がある	1		
・園芸活動に関わる機会が少なく、何をやっているのかわからない職員もいた	1		

2) 職員からみた参加者の変化 (Q4・Q5)

園芸活動プログラムを実施した6週間の期間中で、職員からみた参加者の変化は12名(75.0%)が「あり」と回答したが、「わからない」の回答も4名(25.0%)いた。精神面の変化で最も多かったのは「意欲的になった」が5名、次いで、「笑顔が増えた」が3名いた。行動面での変化で最も多かったのは「離床時間が増えた」が4名、次いで、「行動範囲が広がった」が2名いた。社会面の変化で最も多かったのは「会話が増えた」が7名、次いで、「役割ができた」が4名いた。認知面の変化は「曜日を気にするようになった」が3名いた。「わからない」と回答した4名中3名が認知症ケア経験年数は3年未満であった。また4名全員が、園芸活動プログラムへの参加回数は3回以下で、「園芸活動に関わる機会が少なく、活動中の参加者の様子や変化がわからない」とのコメントもあった。さらに4名全員が園芸活動の興味は「なし」であった。

3) 職員の参加者への関わり方の変化と参加者の反応 (Q6・Q7)

職員の参加者への関わり方の変化は12名(75.0%)が「あり」と回答していたが、「なし」の回答も4名(25.0%)いた。職員の参加者への関わり方の変化で最も多かったのは、「水やりに誘ったり、植物の話題を持ちかけるようにした」が12名であった。職員の参加者への関わり方の変化による参加者の反応で最も多

かったのは、職員が「水やりに誘ったり、植物の話題を持ちかけるようにした」結果、参加者は「自発的な会話が増えた」とするものが7名いた。「なし」と回答した4名全員は、園芸活動の経験と興味がなく、活動への参加回数は3回以下であった。

4) 職員の活動に対する感想・要望 (Q8)

職員の感想で最も多かったのは「参加者が週1回の活動を楽しみにしたり、心待ちにしている様子がみられてよかった」が11名であり、次いで、「生活に新たな刺激が加わり張りが出て、生活の質が向上したと思う」が5名いた。活動への要望は、「期間がもっと長ければ、扱える題材も増えたと思う」が2名おり、「自分でもユニット内で植物を育てて、利用者に楽しんでもらいたいと思った」、「園芸活動中に職員がずっと付き添うことや見に行くことができない現状がある」等が各々1名いた。

考 察

活動時間は87.4%の職員が肯定的な回答をしており、参加者全員が活動中は作業に集中し楽しむ様子がみられていたことから、参加者に適した活動時間であったと考えられた。活動期間は職員の半数以上が「もっと長い方が良い」と回答した。高橋・橋本(2011)は、職員は利用者の良い変化を感じることによって、やりがいや意欲が高まり、利用者が楽しく活動に取り組めるといった相互作用が働き、そのことも活動の継続につながると述べている。本研究でも、職員の感想にあったように、園芸活動を取り入れたことによって、職員は参加者が活動時以外でも園芸活動を楽しんだり、活動日を心待ちにしたりしている様子を見て、参加者の生活の質が向上したことを実感しており、そのことが職員の喜びにつながるという相互作用が働いたと考えられる。また、園芸活動による参加者の肯定的な変化が持続して欲しいといった職員の思いにより、参加者への関わりが増え、職員と参加者の相互作用が深まった。このことが、長期間の園芸活動を望む要因になったと推測される。本プログラムは6週間で1クールとした活動であったが、園芸活動は四季折々の植物を題材にでき1年を通じて行えるため、活動を継続することにより参加者が育てた野菜を食べたり愛でる楽しみが増え、肯定的な変化を持続させることにつながる可能性はある。長期的な園芸活動の効果についても今後検討していく必要がある。

園芸活動プログラム参加者の変化は75%の職員は「あり」と回答し、参加者の小さな変化をよく観察し、園芸活動時以外でも園芸活動の効果を実感していることがわかった。その効果は、精神面、身体・行動面、社会面、認知面の四つの側面が認められ、本プログラムのねらい16項目の一部と一致していた。この背景

には、職員の大半が、「水やりに誘ったり、植物の話題を持ちかけるようにした」等、参加者に植物を媒体とした関わりを主体的に継続して行っていたことが影響したと考えられる。本研究の結果から、参加者の変化は園芸活動時以外でも持続される可能性が示唆されたため、さらに職員への調査を行い、参加者の変化についてのデータを蓄積し、参加者の言動の変化を評価する指標を提示していく必要がある。一方で、「わからない」の回答も4名いた。高橋・橋本(2011)は、活動にあまり関心を示さない職員は利用者の変化にも関心が寄せられないと述べている。本研究においても、介入前の調査で4名全員が園芸活動の興味はなく先行研究の結果と一致した。また4名中3名は、認知症ケア経験年数が3年未満、4名全員が活動への参加回数は3回以下と少なかったことが、参加者の変化に気づきにくい要因になったと考えられた。

職員の参加者への関わり方の変化は75%の職員が「あり」と回答し、植物を媒体とした話題を提供した結果、参加者の自発的な会話が増えて、職員と参加者との信頼関係が深まった。一方で、関わり方の変化は「なし」の回答も4名いた。この理由として、4名全員が介入前の調査で園芸活動の経験や興味がなく、また「園芸活動に関わる機会が少なく、活動中の参加者の様子や変化がわからなかった」とのコメントがあったように、園芸活動に関わる機会が少ない職員は、参加者に対して植物を媒体とした関わりをどのようにすれば良いのか分からない可能性が推測された。また課題にも、「園芸活動に関わる機会が少なく、何をやっているのかわからない職員もいた」、「園芸活動中に職員がずっと付き添うことや見に行くことができない現状がある」とのコメントがあったように、勤務の状況によっては、園芸活動に関わる機会が少なくなった可能性がある。神田ら(2014)は園芸活動を効果的なものとするためには、活動内容だけではなく、職員がどのような意識を持って活動にあたるかが重要な要因であると述べている。本研究において、介入前の調査では、職員の7割近くは園芸経験がなく、ほぼ半数が園芸活動の興味もなかった。しかしながら、終了後の調査では、職員は「活動を楽しみにされている様子を見て、こちらも嬉しい気持ちになった」「生活に新たな刺激が加わり張りが出て、生活の質が向上したと思う」等の感想から、園芸活動の効果を実感しており、また「自分でも植物を育てて、利用者を楽しんでもらいたい」等の感想から、職員の中には園芸活動への興味が増し、園芸活動を実践していきたいといった意識変化がみられた。この背景には活動期間中、職員が参加者と一緒に植物を世話する体験の中で、植物の世話をすればするだけ植物による五感の刺激を受ける、といった相互作用を体験しながら生長への期待感や満足感を抱き、最終的には収穫して食すという成功体験を実感

できたことが影響したと考える。

以上より、今後、園芸活動プログラムをより効果的なものとし、認知症ケアの現場に広く普及させるためには、著者らが、職員と参加者が共に園芸活動を体験し、楽しめる機会を提供することで、職員自身が園芸活動への興味を持ち、園芸活動による参加者の変化を実感できるようにし、職員の意識を変化させることが大事である。また、プログラムの実施者が異なっても参加者に対する介入方法に違いが生じることなく実施されることが必要である。そのためには、著者らがプログラムの構造や方法、評価方法などの詳細な情報を職員に対して伝達し、実践的な指導を行う必要がある。指導を受けた職員が園芸活動プログラムを実施し、その効果が職員間で共有されることによってプログラムの有効性が評価される。さらに、園芸活動を運営するためには、人員確保や園芸に関する知識の習得が要求される。今後は、参加者の状態や背景と認知症ケアを行う施設のニーズや人的・物理的環境の状況に対応した園芸活動プログラムを検討することが必要である。

摘 要

本研究の目的は施設高齢者を参加者として園芸活動を実施し、施設高齢者の園芸活動を支援した職員の意識・行動変化を明らかにすることであった。特別養護老人ホーム入所中の高齢者9名に対する6週間の園芸活動介入後に、職員16名に園芸活動の方法、職員からみた参加者の変化、職員の関わり方の変化と参加者の反応等に関するアンケート調査を行った。介入前の調査では職員の大半が園芸の経験や興味は少なかったが、介入後では活動期間は「もっと長い方が良い」の回答が多く、活動の継続を望んでいた。参加者の変化および参加者への関わり方の変化は「あり」の回答が多かった。園芸活動の介入により、職員は参加者が活動時以外でも園芸活動を楽しみ、活動日を心待ちにしたりしている様子を見て、参加者の生活の質が向上したことを実感し、そのことが職員の喜びや園芸活動への興味、意欲につながるといふ相互作用が働いていた。一方、参加者の変化は「わからない」、関わり方の変化は「なし」の回答があったことは園芸活動の興味の有無、認知症ケア経験年数、園芸活動への参加回数が影響していた。今後、園芸活動プログラムをより効果的なものとし、認知症ケアの現場に広く普及させるためには、職員と参加者が共に園芸活動を体験し職員自身が園芸活動への興味を持ち参加者の変化を実感できるように、著者らが職員の意識・行動を変化させる関わりをしていく必要がある。また参加者の状態と施設のニーズや人的・物理的環境の状況に対応したプログラムの検討も必要である。

謝 辞

本研究にご協力くださった参加者および職員の皆様に深謝申し上げます。

引用文献

- 石井伸弥・秋下雅弘. 2013. 認知症高齢者の薬物療法—課題と対応—. 老年精神医学雑誌 24(8):749-755.
- 神田啓臣・高橋春實・吉田康徳・久能幹雄. 2014. 福祉施設および精神病院における園芸活動の効果, 導入とスタッフの意識に関する考察. 人植関係学誌 14(1):27-33.
- 厚生労働省. 2015. 4.20. 認知症有病率等調査について. <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000033t43-att/2r98520000033t9m.pdf>.
- 熊谷幸子・野内信夫・鈴木静子・稲辺康宏・グロッセ世津子. 2001. 園芸療法と感性; 高齢者への取り組みを通しての事例研究. 感性福祉研究所年報 3 :255-269.
- 増谷順子・太田喜久子. 2013. 軽度・中等度認知症高齢者に対する園芸活動プログラムの有効性の検討. 人植関係学誌 13(1):1-7.
- 内閣府. 2015.4.20. 平成 26 年度版高齢社会白書. http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/pdf/1s1s_1.pdf.
- 長田久雄. 2007. 認知症に対する非薬物療法. 治療 89 (11):3017-3024.
- 斉藤郁恵・高橋友紀・畠山尚子・池田由美子. 2007. 認知症患者の精神症状と行動障害に対する園芸活動の有効性. 日本認知症ケア学会誌 6(2):262.
- 高橋美砂子・橋本由利子. 2011. 介護通所施設利用者における口腔機能低下予防体操の効果 (4) - 介護プログラム終了後の利用者と職員への意識調査から. The Kitakanto Medical Journal 61(4):543-548.
- 寺岡佐和・原田春美. 2003. 施設入居痴呆高齢者 QOL 向上に寄与する園芸療法とその評価方法. Quality Nursing 9(7):581-587.
- 角田純子. 1996. 各機能に対する作業療法の可能性. 日本精神病協会 (監).
- 痴呆性老人のための作業療法の手引. ワールドプランニング. pp. 26-34.
- 豊田正博・天野玉記・柿木達也・杉原式穂. 2009. NIRS による園芸療法の基礎研究 - 園芸がアルツハイマー型認知症者の前頭連合野に与える影響 -. 老年精神医学雑誌 20(増刊-2):129.